

佐賀の果樹 2月号 今月の管理（病虫害防除）

伝染源の除去など、冬季にすべき作業は終わっているでしょうか？病害に感染した枝や落葉、枯れ枝の除去、防風樹の手入れ、間伐等の作業は今月のうちにすべて済ませておきましょう。

<露地カンキツ>

○伝染源の除去

かいよう病等に罹病した葉や枝および黒点病の伝染源となる枯れ枝は取り除き、剪定枝とともに適切に処分してください。

○堆肥およびカルシウム(Ca)資材の施用

果実腐敗対策は、収穫前の殺菌剤散布だけでなく、果実の体質を強化して腐敗しにくくすることが重要です。そのためには樹勢の強化が必要ですので、細根量を増やし、根の活性を高めるために完熟堆肥を施します。カルシウム(Ca)資材の施用も重要です。施用量や資材は土壌の pH 等によって異なりますので、地域の営農指導員・普及指導員に相談してください。

○貯蔵中の果実腐敗対策

貯蔵中の果実については、腐敗果実の除去と適切な温湿度管理を徹底してください。腐敗果実を貯蔵庫内やその周辺に放置すると、胞子が飛散して腐敗が広がってしまいます。そのため、腐敗果実を見つけたらすぐに取り除き、土中に埋めるなどして適切に処分してください。

<ハウスミカン>

○灰色かび病対策

開花期～一次落果期は灰色かび病による被害を受ける時期です。ハウス内が過湿にならないように注意してください。特に多重被覆を行っている場合は、湿度が高くなりやすいので、注意が必要です。循環扇等を活用して植物体上での結露を抑え、病害の発生を減らしましょう。満開から落果期を迎えた作型では、ナリア WDG2,000 倍等にトルキャップ 1,000 倍を加用して散布します。また、樹をゆすることで花卉を落とし、発生を抑えることができます。

<ナシ>

○伝染源の除去

様々な病害の伝染源となる落葉した葉、いぼ病斑、ボケ芽等を除去します。落葉処理の方法としては、細い溝を数か所に掘り風で集める方法や乗用草刈機等で細かく粉砕する方法

がありますが、樹の周囲や園の隅等にはどうしても残ってしまいますので、これらの部分をしっかりと確認して取り除きましょう。粗皮削りはカイガラムシ類やシンクイムシ類などの粗皮下で越冬する虫に対して有効ですが、削りすぎるとフタモンマダラメイガが寄生しやすくなるため注意が必要です。

○白紋羽病対策

白紋羽病対策は済んでいますか？まだの方は早急に行いましょう。生育期に発病した樹とその周辺の樹に対し、フロンサイド S C 500 倍（発病樹）、1,000 倍（未発病樹）のかん注処理を行います。1 樹あたりの処理量は、100 ℓ を目安とし、ムラなくたっぷり処理を行いましょう。

<ブドウ>

○伝染源の除去

巻ひげは黒とう病や晩腐病等の伝染源となりますので、必ず除去してください。べと病や褐斑病の伝染源である落葉や、枝膨病の発病枝の除去も忘れずに行いましょう。

<モモ・スモモ>

○縮葉病・ふくろみ病対策

石灰硫黄合剤 7 倍を**発芽(出蕾)前まで**に散布します。少しでも発芽(出蕾)した後は、薬剤を散布してもほとんど効果は期待できません。なお、マシン油乳剤と近接散布することができませんので、1 月にマシン油乳剤を散布した園では代替剤を用います。代替剤としては、モモではキノンドー水和剤 40 500 倍や、チオノック(トレノックス)フロアブル 500 倍、スモモではチオノック(トレノックス)フロアブル 500 倍等が使用できます。散布ムラがあると防除効果が著しく低下しますので、散布ムラが生じないように丁寧に散布しましょう。特に枝先は薬剤がかかりにくいので、様々な方向からしっかりと散布して下さい。

<キウイフルーツ>

○かいよう病対策

かいよう病は収穫終了後～開花期前後が重要な防除時期です。定期的(一か月に 1 回)に IC ボルドー 66D 50 倍等の銅剤を用いて防除を行いましょう。

枝や幹からかいよう病によると思われる白色～赤褐色の樹液の漏出がある場合は、発見次第早急に切除してください。なお、切除した枝は土中に埋めるなど適切に処分してください。